

『トロイラスとクレシダ』における価値と自己

内藤 亮一

(1999年10月20日受理)

Value and Self in *Troilus and Cressida*

Ryoichi NAITO

E-mail : naitoh@edu.toyama-u.ac.jp

キーワード：価値，自己形成，男性性，騎士道

Key words : value, self-fashioning, masculinity, chivalry

トロイとギリシアの戦争は、ヘレンを奪い合う両軍の名誉を賭けての戦争である。しかし『トロイラスとクレシダ』において、この大義名分は劇中で、両軍の貴重な兵士の血を流す価値がないものであると批判される。ギリシア側ではアキリーズが出陣せずにパトロクラスとともに、幹部を見下して怠慢を決め込んでおり、そのため全軍の士気が上がらない。トロイ側ではヘレンを明け渡し戦争を終わらせるのか、名誉を賭けた戦いを続けるのか、ヘレンの価値をめぐる賛否両論の議論が戦わされる。この劇に感じられる停滞感は、まずはこの戦争の大義名分の、どこに基盤を見出すべきかが、はっきりしないところにある。本稿では『トロイラスとクレシダ』における価値と自己形成の関係を見ながら、トロイの騎士道精神の解体とトロイラスの自己形成、およびギリシアの価値観とアキリーズに焦点を当てて、いかにしてこの劇の停滞感が破られることになるかを見ていきたい。

1. ヘレンの価値：トロイ

2幕2場でヘレンの価値をめぐる、ヘクターはヘレンに血を流す価値はないと言い、ギリシアに帰すべきだと言う。価値はこちらで付けるものであることを主張するトロイラスに、価値は個々の

意志が付けるものではなく、それ自身に価値のあるものが、価値を認められて、価値を有するのだと、ヘクターは内在的な価値の重要性を主張して反論する。

But value dwells not in particular will;

It holds his estimate and dignity

As well wherein 'tis precious of itself

As in the prizer. (2.2.53-56) ⁽¹⁾

それに対して、トロイラスは意志が選択したものを捨てるのは、名誉を汚すと言い、絹を汚したからといって、商人に返すことはしないと反論する(65-70)。さらにヘレンを、王侯たちを商人に変えた真珠に喩える。

Why, she is a pearl

Whose price hath launched above a thousand ships

And turned crowned kings to merchants.

(2.2.81-83)

イーグルトンは、トロイラスが実存主義的な価値理論に固執しており、ヘレンが真珠だから王侯たちが出航したという言い方には、千隻もの船を出航させたから彼女は真珠である、という含みがあるとと言う。彼女に価値を与えるのは彼女が起こした行為であって、彼女の内在的価値ではない(Eagleton, 59)。だがトロイラスは、価値は付与されるものと主張しながら、ヘレンを求めて出航する行為は称賛に値すると、はじめから決めてか

かり、暗黙のうちに、ある種の「客観的な」価値基準に訴えているのではないか、とイーグルトンが続ける(59)。しかし、価値は内在的なものか付与されるものかという議論は、ここで棚上げにされ、ヘレンの価値はトロイラスが暗黙理に訴えた「客観的な」価値基準、つまり騎士道精神と宮廷恋愛の規範に基づくトロイの名誉の問題に擦り替えられる。パリスマヘクターに生命よりも、宮廷恋愛と騎士道精神の理念が尊いことを思い出させる。There's not the meanest spirit on our party
Without a heart to dare, or sword to draw,
When Helen is defended, nor none so noble
Whose life were ill bestowed, or death unfamed,
Where Helen is the subject. (2.2.156-160)

名誉という言葉は持ち出されるだけで、神託のようにヘクターの知性を麻痺させ、自ら持ち出した「自然と国家の法(laws / Of nature and of nations)」(2.2.184-85)に基づく、夫メネレーアスの妻ヘレンへの所有権を無視して、「倫理学を学ぶにふさわしからざる若者(young men, ... / Unfit to hear moral philosophy)」(2.2.166-67)に同意する。絶対的な基準にしても、それ以前の経験から引き出され、過去に誰かが価値があるとしたものにすぎない(Eagleton, 59-60)のだが、騎士道精神と宮廷恋愛の内在的な価値をトロイで疑う者は誰もいない。

ヘレンの価値は、トロイラスにとっては自己形成と関わってくる。2幕2場では、トロイラスはパリスマ賛同してヘレンを賞賛するが、1幕1場では実はヘクターと同じく、ヘレンのために戦うことはできないと言っている。

Fools on both sides! Helen must needs be fair,
When with your blood you daily paint her thus.
I cannot fight upon this argument;
It is too starved a subject for my sword.

(1.1.86-89)

たしかに2幕2場でヘレンを真珠に喩え、王侯が船出したからヘレンには価値がある、と論じたのと同じ理屈をここでも述べてはいる。「ヘレンは両軍が貴重な血を流したからには、それに値するだけの美しいものでなければいけない」のである。しかし、ここではその前に、両軍とも愚か者だと言っており、ヘレン賛美には皮肉な調子が込めら

れている。ここでの彼の本音は、この大儀では戦えないということである。88行目には「空腹では戦えない」というほめめかしがある、と指摘されているが、⁽²⁾ 次の行にあるように、この争いの内容はトロイラスの剣にとっては、「餓死させる主題」なのである。この場のはじめではパンダラスが、クレシダを待ちわびることを、同じ食物の比喩を使って、パンを食べるには作るのを待たねばならないことに喩えるが、クレシダを待って空腹のトロイラスにとって、ヘレンでは腹はふくれないのだ。また「剣」の性的含みを考えれば、クレシダへの欲望に占められているトロイラスにとって、ヘレンは欲望の対象でなく、戦いの大義名分となりえないことは明らかである。

ではなにが2幕2場で、ヘレンに対するトロイラスの価値観を変えたのか。60-68行でトロイラスは、妻を選ぶ場合に、自分の欲望が選んだものを後で避けるのは、名誉に反すると述べる。この発言にトロイラスの、現在のクレシダに対する愛情が下敷きになっていることは間違いない。ヘレンを賛美するようになったのは、女性を追い求める行為を賛美するからであり、パリスのヘレンに対する欲望と、自分のクレシダに対する欲望を重ねている。2幕2場でヘレンを真珠に喩える前に、トロイラスは1幕1場の終わりでも、クレシダを真珠に喩え、自らを冒険商人に喩えている。

Her bed is India; there she lies, a pearl.
Between our Ilium and where she resides,
Let it be called the wild and wand'ring flood,
Ourself the merchant.... (1.1.96-99)

このときトロイラスは、ヘレンを追求するパリスの欲望を模倣し始めているのであり、宮廷恋愛の規範を通して自己を形成しようとしている。トロイラスが宮廷恋愛を自己形成の規範にする以上、ヘレンの価値はそこから遡って決められる。2幕2場の終わりでは、怒りや恨みに掻き立てられたのなら、ヘレンのために血を流したいとは思わないが、ヘレンは名誉の主題である、とトロイラスは言う。

Were it not glory that we more affected
Than the performance of our heaving spleens,
I would not wish a drop of Trojan blood

Spent more in her defence. But, worthy Hector,
She is a theme of honour and renown,
A spur to valiant and magnanimous deeds,
Whose present courage may beat down our foes
And fame in time to come canonize us.

(2.2.195-202)

ヘレンのために血を流すことへの、1幕1場86-89行目の皮肉な調子からの変化は、パリスの欲望を模倣し、宮廷恋愛を自己の基盤とすることで、ヘレンがトロイラスにとって、「餓死させる主題」ではなくなったことを示すのである。

トロイが、ヘレンの内在的価値の問題を棚上げにして、戦争の大義名分を名誉の価値に擦り替えた次の場面で、サーサイティーズはもう一度ヘレンの価値の問題を蒸し返す。

All the argument is a whore and a cuckold; a good
quarrel to draw emulous factions and bleed to
death upon.

(2.3.69-71)

たとえヘレンが「ふしだら女」であっても、騎士道精神はヘレンに関係なく、それ自身の価値を持ち続けうるのか。それは視点を変えれば、嫉妬深い対抗グループの争いにすぎないのではないかと、一方で劇は問いかける。

1幕2場でパンダラスがクレシダに、トロイラスと戯れるヘレンの様子を聞かせるとき、クレシダはヘレンを「陽気に浮かれるギリシア人(a merry Greek)」(1.2.105)と形容し、3幕1場で実際に登場するヘレンも、パリスを戦場に行かせず(130-31)、パンダラスには歌をせがむだけで、およそ名誉の争いに値する女性とはいえない。この娼婦のようなヘレンの実体は、トロイの信じる騎士道精神と宮廷恋愛の価値が、トロイラスが主張したように、彼女の内在的な価値と切り離して考えるのかどうかという問題を改めて問い直す。

2. ヘレンの価値：ギリシア

ではギリシアでは、ヘレンの価値をどのように考えているのだろうか。ギリシア側はヘレンに対して、否定的な見解しか持たず、ほとんど論じることもない。ヘレンのことが言及されるとしても、メネレーアスが間男されたことを、むしろからか

う程度である。サーサイティーズの他には、アキリーズがメネレーアスを「寝取られ亭主(the cuckold)」(3.3.64)と呼ぶ。4幕5場ではパトロクラスがヘレンを種に、メネレーアスからクレシダへのキスを掠め取る(28-30)。ユリシーズはヘレン強奪をめぐる争いを、間男の角を飾る恥辱と見なす。

O deadly gall and theme of all our scorns,
For which we lose our heads to gild his horns!

(4.5.31-32)

メネレーアス自身もトロイとギリシアが一騎打ちで一同に会したときに、ヘレンの名は戦争の原因である暗い話題なので、持ち出さないで欲しいと言う(4.5.182)。おそらく、4幕1場でダイオミディーズがパリスに語る批判的見解が、ヘレンに対するギリシアの見解を代表している。ダイオミディーズはヘレンを「娼婦(a whore)」(68)と呼び、彼女のために両軍の兵士が死んでいるが、その死に値する言葉を語ったことはないと言明する(70-76)。トロイラスの価値の論理(1.1.86-87)は、ここでは通らず、彼女自身に価値がなければ、彼女の価値は多くの人の死によっても高まることはない。それに対してパリスは、ギリシアを買い取りたい品物をけなす商取引の論理と結び付け、ヘレンは売り物でないと述べて、トロイを騎士道精神に結び付けようとするが、ヘレンに対する評価の違いは、ギリシアとトロイの騎士道精神に対する、価値観の違いを明瞭にするのである。

だがヘレンに価値がないのなら、なぜギリシアは戦争をしているのか。プロローグにおいては確かに、誇り高きギリシアの王侯たちが高貴な血を怒りにたぎらせて、略奪されたヘレンの眠るトロイを略奪する誓いを立ててやって来たことあり、これが戦争の原因とされる。

From isles of Greece

The princes orgulous, their high blood chafed,
Have to the port of Athens sent their ships...

... and their vow is made

To ransack Troy, within whose strong immures
The ravished Helen, Menelaus' queen,
With wanton Paris sleeps; and that's the quarrel.

(Prologue, 1-3, 7-10)⁽³⁾

しかし、劇中ではヘレンを奪われたことに対する、ギリシアの怒りは表明されない。トロイが戦争の大義名分を議論するのに対し、ギリシアの関心は大義名分よりは戦争に勝つことの方にあり、1幕3場で議論されるのも、トロイが陥落しないことに関してである。アキリーズの嘲笑が問題となるのは、戦争の大義名分云々より、戦術が嘲笑の種とされるからである。‘The great Achilles ... / Lies mocking our designs.’ (1.3.142, 146)

7年間トロイが陥落しない理由を、ユリシーズはアキリーズが高慢となって、ギリシア軍の秩序を乱しているところに見出す。ユリシーズはギリシアを一つの身体に喩え、アガメムノンを‘nerve and bone of Greece, / Heart of our numbers, soul and only spirit’ (1.3. 55-56), アキリーズを‘The sinew and the forehead of our host’(143)と呼ぶが、その喩からすれば、この2人が一つにならなければ、ギリシアという身体は機能しない。だが現在のギリシアは、エージャックスの身体に象徴されるカオスの状態である。トロイの血をひくギリシアの将軍という、ハイブリッドな存在のエージャックスは、1幕2場のアレグザンダーの描写では、多くの動物から特性を盗みとって、美点も欠点もすべて持ちながら、それらが統制されていない(1.2. 19-30)。このアキリーズとエージャックスが、幹部を侮っているのを治さなければ、トロイは倒れないとユリシーズは説く。

ではユリシーズの価値観とはどのようなものであるのか。ユリシーズがある著者の見解として披露する価値観によれば、内在的な価値を認める点はヘクターと同じながらも、その価値は他者に認められて、付与されなければ無いと同じである。そして現実には価値のないものが称賛され、価値のあるものが見下されることもあると述べ、価値が付与されるものであることを強調する点では、トロイラスに近い(3.3.116-24, 128-31)。しかも価値が付与されるのは、今、現在のことに関してである。「時」は過去を忘却の中に葬るのであり、過去の功績はすぐに忘れられる(3.3.146-54)。これはあくまでユリシーズが、アキリーズに向けて言ったことだが、このような価値理論によれば、過去を振り返り、過去に価値の基準やコンテク

トを求めるネスターは、嘲笑の的となる。事実アキリーズらからは、ネスターの老体が嘲笑の的となる。価値は常に変ってゆくコンテクストの中でしか求めえず、秩序は常に解体の危機にさらされる。

ユリシーズの理論によれば、そのものの能力は他者に反映されて、はじめて表れるのであるが、パトロクラスが行う幹部の戯画的模倣は、幹部の姿を歪めて映す鏡そのものであり、それが外に表された幹部の能力であり、価値となる。一方、アキリーズが幹部を無視するのは、アキリーズが内在的な価値観を信じており、自らの価値は、過去の功績ですでに立証済みで、幹部側はアキリーズの価値を認めていると、決め込んでいるからである。

ユリシーズはアキリーズの高慢を治すため、逆にアキリーズの嘲笑的態度を模倣し、幹部側がアキリーズを無視し、エージャックスを称賛することで、ギリシア幹部の評価という他者の目のコンテクストのなかに、アキリーズの自律的自己を解消することを提案する。そのためエージャックスにヘクターの一騎打ちの相手という栄誉を与え、名声は時によって忘れ去られるという、ルネサンスの自明の理をアキリーズに示そうとする。

3. 一騎打ちの価値

騎士道精神の信奉者であるヘクターは、休戦中にも名誉の機会を逃すまいと、ギリシアに挑戦状を送る。イーネアスに託してギリシア軍に向けたその挑戦状とは、ヘクターが愛を捧げた婦人はギリシアの婦人の誰よりも、「より聡明で美しく誠実である(wiser, fairer, truer)」(1.3.275)ことを証明するという内容である。ヘクターがトロイラスとパリスの主張に賛同したのも、この一騎打ちの挑戦状の趣旨に一致したからでもある。

このヘクターの挑戦に対して、ギリシア側の反応は醒めている。アガメムノンとネスターが、ギリシアの女性の名誉を守ることを告げるが、現実にはクレシダが連れて来られるまで、ギリシア側に女性は存在しない。ネスターはこの戦いが「本気でない戦い(a sportful combat)」(1.3.336)とは

いえ、ギリシアの名誉が掛かっているとすると、彼の老体はギリシアのなかにあって、時代遅れの騎士道精神を象徴する存在である。むしろ、ともに応じるよりは、商取引の論理で、この挑戦をアキリーズの高慢をくじくことに利用することを、ユリシーズはネスターに提案する。

Let us, like merchants, show our foulest wares,
And think perchance they'll sell; if not,
The lustre of the better yet to show
Shall show the better. (1.3.360-63)

最強の対戦相手を温存することで、ヘクターの功名心をくじくユリシーズのマキャベリの戦略は、ギリシア側の騎士道精神に対する醒めた見方を示し、その価値を相対化する。

いずれにせよ、ヘクターとエージャックスの一騎打ちは、両軍にとって、現在の膠着状態を打開するための、絶好の機会として捉えられ、劇はこの一騎打ちをクライマックスとして進行する。トロイにとっては騎士道精神の証明であり、ギリシアにとってもアキリーズの高慢をくじき、秩序の回復をもくろむものとなる。

しかし、この一騎打ちには肝心なもの、つまり女性が欠けている。ヘレンを価値なしとするヘクターが想定する婦人が、妻アンドロマキであるとは考えにくい。ヘクターのアンドロマキに対する態度は、妻の所有者であり主人であるという、家父長制度における夫の立場を示しており、僕である騎士のものではない。この挑戦は結局、名誉を求めるがために架空の理想の女性を想定するという、トロイの形骸化した宮廷恋愛と騎士道精神を示すものでしかない。

ギリシアの側に女性がいないことはすでに述べたが、一騎打ちの当日、ヘクターが登場する直前に、トロイからクレシダが連れて来られることは、クレシダがギリシアの守るべき女性であるかの印象を与える。だが、彼女が娼婦のように迎えられることは、騎士道精神をギリシア側がどう捉えているかを象徴している。そしてヘクターとエージャックスという血縁同士の戦いは、アキリーズに本気で流血の戦いをするのではない「乙女の戦い(A maiden battle)」(4.5.88)と嘲笑される。

名誉を守るべき女性は不在か、娼婦のような扱

いを受けるクレシダによって表され、トロイの形骸化した騎士道精神を象徴するヘクターと、ギリシアのカオスを象徴するエージャックスが対戦するこの一騎打ちは、現在の膠着したトロイ戦争の縮図といえる。結局、大義名分が揺らぐトロイと統率力のないギリシアの今を象徴するように、最初から盛り上がらない一騎打ちは、中途半端な終わりと抱擁、ホモソーシャルな集団による宴という結果になる。

このトロイとギリシアの膠着状態が開かれるのは、トロイラスとアキリーズの狂気を通してである。

4. トロイラスの自己形成

パリスがヘレンを通して自己を宮廷恋愛の騎士にしたのと同じように、トロイラスはクレシダを宮廷恋愛の理想の女性として想像し、自己形成の要とする。クレシダはパリスの欲望を模倣するための媒体であり、騎士道精神と宮廷恋愛の規範によって、クレシダに価値が付与される。宮廷恋愛の理想の女性として、女性の貞節が要求されるが、トロイラスはクレシダが「頑固なまでに操が堅い(stubborn-chaste)」(1.1.93)ことを述べた後で、処女性の象徴でもある「真珠」(96)(Bevington, 137)に喩える。4幕4場の別れの場面で、トロイラスがクレシダに‘be true’という表現を5回繰り返すのも、クレシダの貞節が彼の自己形成にとって不可欠であることを示す。

しかし実際のパリスとヘレンが享乐的で、宮廷恋愛と騎士道精神の理想から外れているのと同様に、トロイラスはクレシダへの明らかな性的欲望を暴露する。トロイラスが想像する、豪華な富の象徴であるインド(Bevington, 137)というベッドに横たわっている真珠は、「女性の大切なもの」の象徴(Bevington, 137)でもある(1.1.96)。3幕2場ではクレシダへの性的欲望から生じる期待に目眩すら感じるトロイラスは、パリスと同じく快楽に溺れる危険を孕んでいる。トロイラスはクレシダの価値は自分を騎士にしてくれる理想の女性としての存在にあると見るが、一方でその価値を性的欲望の快楽を満たしてくれる点に置いている。

その過剰な欲望はトロイラスの男性性の危機を惹き起こし、騎士としての彼の自己形成を破綻させかねない。1幕でトロイラスは恋ゆえに出陣せず、イーネアスに理由を聞かれ、こう答える。

Because not there. This woman's answer sorts,
For womanish it is to be from thence.

(1.1.102-103)

トロイラスの模倣の対象であるパリスも、ヘレンに留められて、3幕1場では出陣しないで、音楽を聴いているが(3.1.130-31)、このときトロイラスもクレシダと一緒にいて、出陣していない。名誉の戦いを続けるべきだとヘクターを説き伏せたその日に、トロイラスは自分の言葉を守っていない。トロイラスの男性性はパリス同様に女性への欲望におぼれて、すでに傷ついているといえる。

トロイの外部では騎士道精神と宮廷恋愛の価値が絶対ではなく、軽視されている以上、トロイラスの自己形成がトロイの外に出れば、破綻することは容易に想像できる。4幕4場、ダイオミディーズは、クレシダに仕える騎士としてのトロイラスの立場を無視して、クレシダを称える。トロイラスは、誰がクレシダの騎士であるかを明言するため、ダイオミディーズが僕となるには値しないほど、クレシダは尊いのだと言う。‘She is as far high-soaring o'er thy praises / As thou unworthy to be called her servant.’(4.4.123-34)しかしダイオミディーズは、クレシダは「彼女の価値にしたがって評価される(To her own worth / She shall be prized)」(4.4.132-33)と述べ、トロイラスが彼女に付与した価値を否定する。

O, be not moved, Prince Troilus.

Let me be privileged by my place and message

To be a speaker free. When I am hence,

I'll answer to my lust.

(4.4.129-131)

トロイラスが付与したクレシダの価値は、2幕2場で展開されたトロイラスの理論に従えば、クレシダを求めるトロイラスの騎士道的行為によって、保証されているはずである。その価値を否定するということは、トロイラスの騎士道的行為の内在的価値を否定し、騎士としてのトロイラスを否定するということである。そうなると、ヘレンの価値が議論されたときは逆に、騎士道精神に

価値を与えるのは、クレシダの内在的な価値であり、クレシダがギリシアで貞節な女性であることを証明すれば、それを追求めるトロイラスの行為にも価値が付与される。トロイラスの騎士としての価値は、ギリシアでのクレシダに掛かってくる。

もともと1幕1場のところで見たとように、トロイラスはクレシダへの欲望が先にあり、その後パリスを模倣して、美しく貞節な女性を追求める騎士道精神を自己の形成モデルとした。トロイラスにとってクレシダの内在的な価値は、騎士道精神の価値に先ずるものであった。

しかしそうするとトロイラスは、自分の価値理論の意味する結果を、本当には理解していないことになる。トロイラスの理論に従えば、クレシダの価値は何にせよ、何らかの基準に基づいてこちらが付与したものでもあり、クレシダの内在的な価値ではない。トロイラスはクレシダが、不変の「単一体(unity)」(5.2.148)と信じているが、男性社会における女性の自己とは、皮肉にもトロイラスの価値理論に極めて符合するような、コンテキストの中で浮遊する記号なのである。

自己は完全に自律した存在となるにせよ、完全にコンテキストに依存した暗号になるにせよ、結局は無に帰するのであり、これら2つのうちのどちらか一つを選ぶことはできない(Eagleton, 61-62)。だが女性の自己は、ほとんど自律した自己を持つことを許されず、彼女が置かれた男性社会のコンテキストの中でしか自己を形成できない。クレシダの自己がトロイとギリシアでは、男性社会の変化に応じて変るのは当然である。彼女はトロイでの宮廷恋愛的男性社会で形成された自己を維持しようと抵抗しているが、男性社会によってトロイに留まることを許されない。そして、トロイとギリシアを含めたより大きな競争的男性社会のなかで、トロイのクレシダは解体され、ギリシアで再構築される。

クレシダの自己が一つの単体ではなく、いくつもの欲望の交錯したところで作られていることはクレシダ自身も気付いている。トロイラスと結ばれる場面でクレシダは言う。

Let me go and try.

I have a kind of self resides with you,
But an unkind self that itself will leave
To be another's fool. (3.2.142-145)

トロイラスのそばにいる 'a kind of self' は、トロイラスの慰み者になるために自分で決定できる自己を捨てようとする 'an unkind self' のことなのか。あるいは 'an unkind self' はトロイラスのもとに留まる自己とは別に、トロイラスのもとを去って別の人の慰み者になることに決めたもう一つの自己なのか。クレシダの中に現われた、いくつかの自己が、お互いにどういう関係なのか、特定することはできない (Belsey, 95)。ギリシアでダイオミディーズの欲望にしたがって、自己を形成するクレシダは、逢引の場面で自己の分裂を告白し、それを女性性の必然と重ねる。

Troilus, farewell! One eye yet looks on thee,
But with my heart the other eye doth see.
Ah, poor our sex! (5.2.113-15)

トロイラスに理解できないのは、まさしくその自己の分裂である。トロイラスには2つのクレシダが繋がっていることを理解することができない。

If beauty have a soul, this is not she;
If souls guide vows, if vows be sanctimonies,
If sanctimony be the gods' delight,
If there be rule in unity itself,
This is not she. (5.2.145-49)

もし美に魂があり、魂が誓いを導き、誓いが聖なるもので、聖なるものが神の喜びで、単体が分割できないものならば、目の前のクレシダはクレシダではない。しかし理性は目の前のクレシダがクレシダであると告げる。クレシダであるとすれば、美には魂がないことになり、神の喜びとも縁が無くなり、単体は分割されうることになる。それは貞淑なクレシダという一つのイメージに自己を賭けてきたトロイラスにとっては、自己の基盤を失うに等しい。自己の基盤に、絶対的基準がないことを悟ったとき、トロイラスの中で、ユリシーズの言葉を借りれば「正と不正はその名を失い」、カオスが産まれる。

カオスから噴出したトロイラスの怒りは、ダイオミディーズ個人に向けられた復讐となる。これがトロイの大義名分を超えていることは言うまで

もない。2幕2場で、ヘクターは復讐や快楽は正しい決定ができないと否定している。

... for pleasure and revenge
Have ears more deaf than adders to the voice
Of any true decision. (2.2.171-73)

トロイラスもヘレンの議論では、「怒り(our heaving spleens)」(2.2.196)によって惹き起こされる戦いを否定している。だが騎士道精神の崩壊をすでに見たトロイラスは、倒れた敵を見逃すヘクターの精神を「慈悲という悪徳(a vice of mercy)」(5.3.37)と否定する。トロイラスの矛盾に満たされた精神は、この撞着語法にも反映されているが、さらにトロイラスはヘクターの憐情は母親たちに任せておけばよいことで、武具を着けた時は、毒のある復讐心が剣に跨り、憐れみを振り払うのだ、と言う。

Let's leave the hermit Pity with our mothers,
And when we have our armours buckled on,
The venom'd vengeance ride upon our swords,
Spur them to ruthless work, rein them from ruth.
(5.3.45-48)

劇中でクレシダへの惑溺から戦場を避け、女性化していたトロイラスの男性性は、クレシダの逢引を契機に女性嫌悪へと変わり(5.2.135-139)、慈悲という女性性を振り切って暴力的になる。

トロイラスとダイオミディーズの戦いは、ヘクターとエージャックスの「乙女の戦い」の再現である。ダイオミディーズはトロイラスに代わって、騎士として自己形成しようとする。

Go, go, my servant, take thou Troilus' horse;
Present the fair steed to my Lady Cressid.
Fellow, commend my service to her beauty;
Tell her I have chastised the amorous Trojan
And am her knight by proof. (5.5.1-5)

しかしサーサイティーズの「淫売の奪い合い」(5.4.23-24)という言い方が全面的に正しいとは言えなくても、対象になる女性が「聡明で、美しく、誠実」でないことは当の2人が知っている。ヘクターとエージャックスの一騎打ちと同様に、対象になる女性の内在的な価値は関係なく、男性の暴力的な覇権争いがあるにすぎない。⁽⁴⁾

5. アキリーズの自己形成

アキリーズの自己を解体するため、3幕3場でユリシーズは、幹部にアキリーズを無視することを指示する。アキリーズは、人間は他者の目の中に自分の評価を見出し、地位や富など外から付けられた名誉でしか尊敬されない、という価値観は認めている(3.3.75-87)。だが、他人はどうあれ、彼だけは「運命と友達」(3.3.88)なのである。ユリシーズは、価値は内在的だけでなく、その価値を他者に示して、他者から再び付与されなければ、価値は無いと同じであることを説く。しかも過去の功績は直に忘れられるので、常に能力を示さなければ、価値はないと思われてしまうのである。さらにアキリーズがトロイの王女に恋しているがゆえに、出陣しないことは周知の事であり、それがアキリーズの男性性を傷つけることを付け加える。

パトロクラスも、戦時において女のような男は、男のような女より嫌われることを忠告する。そしてアキリーズが戦場に行こうとしないのは、寵愛するパトロクラスが行きたがらないためであると、彼自身も非難されていることを述べ、出陣するように促す(3.3.218-27)。

ユリシーズとパトロクラスは、価値が他者から付与されるものであるということと、男性性が傷つくことを持ち出して、アキリーズの戦士としての自己が危ういことを説く。

これに対してアキリーズも、エージャックスとヘクターの一騎打ちに、名誉の危機を感じる。

Achilles: Shall Ajax fight with Hector?

Patroclus: Ay, and perhaps receive much honour by him.

Achilles: I see my reputation is at stake.

My fame is shrewdly gored. (3.3.227-30)

パトロクラスを別にして、アキリーズの他者になりうるのは、アキリーズが見下し、価値を認めないギリシアの幹部よりも、彼の戦士としての価値を反映してくれるヘクターである。ヘクターを見たいというアキリーズの欲望は女の欲望として語られ、そこに文字通り、自分を見出す他者という「鏡」を求めている。

I have a woman's longing,

An appetite that I am sick withal,

To see great Hector in his weeds of peace,

To talk with him, and to behold his visage

Even to my full of view. (3.3.239-43)

エージャックスの増長ぶりを、サーサイティーズから聞かされたアキリーズは、心がかき乱れ、底が見えないと漏らす。それは他者の目の中で形成されなければいけない、不安定な自己に気づいたことを示す。

My mind is troubled, like a fountain stirred,

And I myself see not the bottom of it.

(3.3.309-10)

かき乱された泉のイメージは、ナルシスのように自己に陶醉していたアキリーズが、陶醉から目覚めさせられ、新たに自己を形成するの必要を感じていることを暗示する。⁽⁵⁾

しかし、実際の形骸化した一騎打ちは、アキリーズの名声を奪うには至らず、その自己を解体するには至らない。アキリーズが唯我独尊的な自信を取り戻しているのは明らかだが、ヘクターと翌日の出陣を約束しながら、トロイの女王ヘキューバからの手紙と、アキリーズの恋人であるその娘からの贈り物に決意を翻すように、男性性を再び自ら危機にさらす。騎士道の男の名誉は、女への欲望の前に軽んじられる。

アキリーズが出陣するのは、ギリシア幹部の目に自分の価値を示すためでもなく、ヘクターという他者に自分の価値を反映させるためでもなく、パトロクラスの死に対する復讐のためである。それは女性への惑溺も吹き飛ばしてしまうほどである。シェイクスピアは、パトロクラスの遺体が運ばれてから、アキリーズの出陣までを、わずか15行ほどの間に凝縮している。

Nestor: Go, bear Patroclus' body to Achilles,

And bid the snail-paced Ajax arm for shame.

(5.5.17-18)

Ulysses: O, courage, courage, princes! Great Achilles

Is arming, weeping, cursing, vowing vengeance.

Patroclus' wounds have roused his drowsy

blood...

(5.5.30-32)

この短さはアキリーズの怒りが、突然に噴出した

ことを強調する。アキリーズにとってパトロクラスは、ギリシアにおいて、彼の自律的な価値を支えてくれていた見えざる他者であるが、同時に彼を女性化させていたのも、パトロクラスである。パトロクラスの出陣はアキリーズと自分の不名誉な評判を否定し、男性性を示そうとしたことを意味するが、そのパトロクラスがヘクターに殺されたことは、アキリーズから自己を支える他者という基盤を奪うと同時に、過剰な男性性に向かわせる。そしてアキリーズはギリシアのためではなく、ヘクター以外は相手にしないというように、ヘクターに対する個人的な復讐のためにのみ出陣する。

Come, come, thou boy-queller, show thy face!
Know what it is to meet Achilles angry.
Hector! Where's Hector? I will none but Hector.

(5.5.47-49)

そしてエージャックスまでも、トロイラスに友人を殺されたため、戦いに復帰し、友人の復讐というモチーフを共鳴させる。

6. ヘクターの死

ヘクターは5幕で、今日は騎士道精神に満ちていると述べ、トロイを代表して戦うと述べる。

I am today i'th' vein of chivalry.

...

I'll stand today for thee and me and Troy.

(5.3.32, 36)

そして倒れた敵を見逃すことが、「正しい作法(fair play)」(5.3.43)であり、アンドロマキヤカサンドラやブライアム王までが止めるにもかかわらず、ギリシアと出陣を約束したからには行かねばならぬと言う。⁽⁶⁾

And I do stand engaged to many Greeks ... (68)

I must not break my faith. (71)

皮肉なことにこの名誉へのこだわりは、アキリーズの出陣の約束反故と、ヘクターが非武装のときにアキリーズの集団に惨殺されるという、非騎士道的な行動でこけにされ、ヘクターの死はトロイと騎士道精神の価値の死を代表したものになる。

この劇においてそれぞれ、騎士道、クレシダ、自分自身の内在的な価値を信奉するヘクター、ト

ロイラス、アキリーズのうち、トロイラスとアキリーズはそれらの価値が相対化されるのを体験し、自己の基盤を失い狂乱する。ヘクターは相対化された価値にしがみついていることに、気づかぬまま死を迎える。

この劇における、膠着状態にある戦争を最後に動かすのは、大義名分でも戦術でもない。それは自己の基盤となる価値が崩壊した瞬間に生まれるエネルギーであり、トロイラスとアキリーズの復讐をその中心に据えたのは、大義名分や戦術以上に戦争を動かす要因となる、秩序を形成すべき価値が崩壊したときに生ずる反理性的で暴力的な人間関係の存在を強調するためではなかっただろうか。復讐心を剣に跨らせるというトロイラスに対して、ヘクターは「なに、野蛮だぞ」と叱責する。が、ヘクターを呼び捨てにして、トロイラスはこう答える。「ヘクター、それが戦争だ。」⁽⁷⁾

Hector: Fie, savage, fie!

Troilus: Hector, then 'tis wars.(5.3.49)

注

- (1) シェイクスピアからの引用はアーデン第3版による。
- (2) K. Deighton, ed. *Troilus and Cressida*. Arden Shakespeare, 1st ser. (1906). アーデン第3版の注に引用されている。
- (3) 『トロイラスとクレシダ』の主なる2つのテキストのうち喜劇と銘打ってあるクォート版(1609)ではプロローグはない。プロローグは悲劇の名が冠せられたフォリオ版(1623)に付けられる。(Bevington, 3,11)
- (4) ベヴィントンによれば、トロイの騎士道精神は疑われ、傷つけられるのであり、戦いの対象となる女性がいらないことが、本質的には男性間の競争であることを強調する。それは男性の自信が、他の男性に対する暴力を通して立証されなければならないという、不安を暴露するのである。(Bevington, 30-31)
- (5) ラカンの概念を援用すれば、「他者が鏡の役割を果たすようになり、鏡像自己は他者

によって担われるようになる」(新宮, 173)
と言えよう。

- (6) この劇において男性の女性性の抑圧は、アキリーズとトロイラスの過激な男性性、ヘクターが妻アンドロマキや妹カサンドラを無視し、抑圧する結果が示すように、暴力的な結末を産む。
- (7) トロイラスがヘクターを呼び捨てにするのは、劇中で、こと43行目の2回だけである。

引用文献

- Belsey, Catherine. "Desire's Excess and the English Renaissance Theatre: *Edward II*, *Troilus and Cressida*, *Othello*." *Erotics Politics: Desire on the Renaissance Stage*. Ed. Susan Zimmerman. London: Routledge, 1992. 84-102.
- Bevington, David, introduction. *Troilus and Cressida*. By William Shakespeare. The Arden Shakespeare, 3rd Series. Walton-on-Thames: Thomas Nelson, 1998.
- Eagleton, Terry. *William Shakespeare*. Oxford: Blackwell, 1986.
- 新宮一成 『ラカンの精神分析』講談社, 1995。